

齢について考える

“亀の甲より年の功”・長年の経験から培ったノウハウが威力を発揮するという高齢者のタレント性を謳った言葉ですが、その一方では“もう齢”年甲斐もない“いい齢して”・”等など、私たちは日常会話の中でいろいろ高齢の弱みを口にしています。

そのくせ相手から“そうですね”と相槌を打たれたらムツとすと思います。正月を迎えるごとに年を取ると考えてきた時代には高齢になると身体も気持ちも衰えるから社会の表舞台から隠退し、労ってもらうものと考えてきました。つまり加齢は加老であり、それを象徴する制度が日本特有の定年制です。

アメリカでは定年をもうけることは年齢差別だとして 1967 年に成立した市民権法の中で人種差別とともに禁止されています。元々自主自立が建前のアメリカでは“もう齢だから”という表現がありません。日本の定年に当たるリタイアという言葉は職場や商売から引退することで、隠退ではありません。加齢と加老とは別だと考えるからです。

定年制には人口過剰の時代に若者に職場を確保する狙いがありました。実は私たちが別の場面ではあの人には精神年齢が若い“とか”肉体年齢が若い”などと言い、社会との関わりを指す“社会年齢”という言葉も使われるなど齢にもいろいろな内容あることを承知しているのです。

さらに、加齢の過程をたどると、幼児期から思春期に向けて身体と知能が急速に発達し成年から中年、高年に進んで行く間では体の発達は鈍化しますが知的能力はその人のおかれた環境に応じて生涯発達を続けることが分かっています。つまり、年を取る過程は生涯止まることはなく、発達と退化を織り交ぜて続くわけで、一概に退化現象と決めつけるわけにはいかないのです。

体の発達は成人期で終わると言われますが、その後も退化を避けられない機能と退化を遅らせることが出来る機能があります。だからジョギングをしたり健康食品に気を遣ったりします。

私たちが長生きできるようになったのは実は加齢に伴う諸要件が戦前に比較して遙かに整い恵まれてきたからと考えられます。ただ私たちの意識の中には日本がフランスが115年かかった高齢社会にたった24年で到達してしまったために加齢の内容が変わっていること気付かず、一概に“年寄りが増えて大変だ”と心配性でやきもきしているわけです。元気に暮らせる高齢者が増えたからこそ高齢社会になったわけですから、齢にもいろいろな要素があること知り、高齢者の強みを知り、それを活かすことでマイナス面を抑え、肉体年齢、精神年齢、そして社会年齢をバランス良く組み合わせることで熟成した焼酎のように“亀の甲より年の功”、レッツ・ゴーといきましょう。